

エジプト、サッカラ・ネクロポリスの展開を探る

—エジプト、第9次北サッカラ遺跡調査(2025)—

河合 望 筑波大学人文社会系教授
柏木 裕之 東日本国際大学客員教授
竹野内恵太 早稲田大学非常勤講師
岡部 睦 金沢大学大学院博士後期課程
進藤 瑞生 金沢大学大学院博士後期課程

Exploring the Development of the Saqqara Necropolis, Egypt: Preliminary Report on the 9th Season of the Excavation at North Saqqara in 2025

KAWAI, Nozomu Professor, Institute of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba
KASHIWAGI, Hiroyuki Visiting Professor, Higashi Nippon International University
TAKENOUCHI, Keita Part-time Lecturer, Waseda University
OKABE, Mutsumi Doctoral Student, Graduate School, Kanazawa University
SHINDO, Mizuki Doctoral Student, Graduate School, Kanazawa University

1. はじめに

日本・エジプト合同北サッカラ遺跡調査隊(現・筑波大学・エジプト観光考古省合同調査隊)は、2017年よりサッカラ遺跡北部台地東端部および東側斜面において発掘調査を継続している(図1、図2)。これまでの調査により、初期王朝時代、古王国時代、新王国時代、末期王朝時代、プトレマイオス朝時代、ローマ支配時代に属する多様な墓が検出された(Kawai 2021a, 2021b, 2024; 河合 2024, 2025)。

2025年8月16日から10月1日に実施した第9次調査の主目的は以下の4点である。すなわち、①崖上のOperation Aに位置するマスタバ墓 NST03の埋葬室の完掘および上部構造の範囲確認、②崖下のOperation Bに位置するマスタバ墓 NST06のシャフト完掘と埋葬室の確認、③Operation Bに分布する土壙墓群の発掘調査、④グレコ・ローマン時代のカタコンベ(地下集団墓地)のクリーニング調査の継続と入口前の発掘調査である。

2. Operation A の発掘調査

発掘調査地区のうち、崖上のサッカラ台地東端部はOperation Aと称され、これまで初期王朝時代末期から古王国時代初期の日干レンガ製マスタバ墓、新王国時代第18王朝の土壙墓、末期王朝時代の土壙墓、末

期王朝時代からプトレマイオス朝時代の日干レンガ製墓などが検出されている。

第9次調査では、マスタバ墓 NST03(図3)の埋葬室の完掘および日干レンガ製上部構造の構造と範囲の確認を主目的とした。埋葬室は、シャフトから直線状に延びる通廊の最奥部で直角に西へ折れた位置に開口し、南北軸を有する。門口部に近い埋葬室の床面には不整形のピットが穿たれていた。埋葬室内部をクリーニングした結果、床面は粗仕上げであり、とくに南東隅は斜めに削られており、副葬品の設置には適さない形状であった(図4)。このため、副葬品は主として北半部および西側に集中して配置されていたと推定される。

出土遺物の中心は大量のビール壺であり、ほかにパン型土器、浅鉢、石製大型貯蔵壺、石製把手付壺、石鉢などが伴出した。木片および人骨は南西部に集中して出土した。特筆すべきは、多数のビール壺内部に一定量の泥が充填されていた点である。泥の表面が水平であることから、壺を直立させた状態で意図的に充填された「模造の供献」であり、象徴的供物儀礼の存在を示唆する。土器および石製容器の年代から、NST03は第2王朝末から第3王朝初頭頃に築造・使用されたと推定される。

さらに、NST03の上部構造は、西側に位置するより古い日干レンガ建造物と構造的に接続していることが確認された。西側建造物が先行して築造され、その

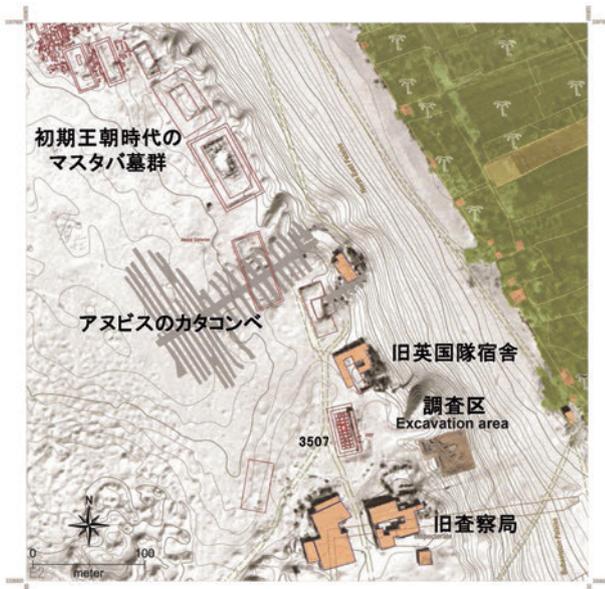


図1 調査区周辺地図(The North Saqqara Archaeological Sites: Handbook for Risk Analysis, 2012 を改変)



図2 発掘区平面図(オルソ画像)

東壁を再利用・補強する形でNST03の北壁および西壁が構築された可能性が高い。仮説ではあるが、西側構造物は初期王朝時代第1王朝のマスタバ墓であったと推測される。同構造物中央の埋葬施設とみられる大規模矩形ピット(R-74)(図5)からは、大量のイヌのミイラおよびそれに付随すると考えられる陶棺片が集中して出土した。複数の陶棺がまとめて廃棄された状況は、埋葬というより投棄に近い行為を示す。また、北側ピット内にはシャフト(NST07)(図6)が掘り込まれており、ここからも大量のイヌ骨が検出された。これらの動物埋葬は、近傍のアヌビエイオンやイヌのカタコンベとの関連が想定される。

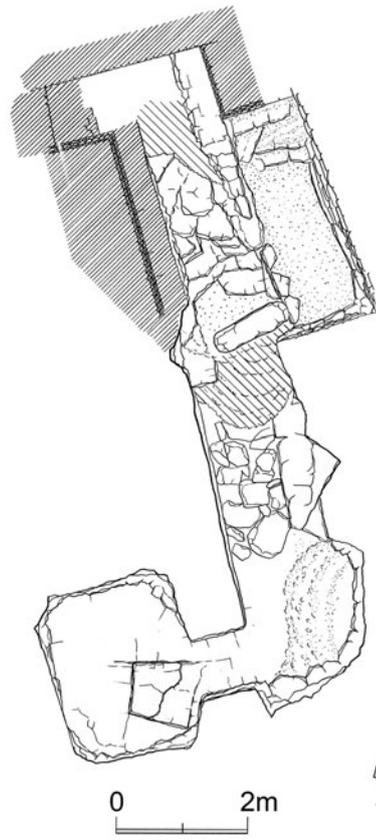


図3 NST03 下部構造(作図：柏木裕之氏)



図4 NST03 埋葬室完掘状況

3. Operation B のマスタバ墓 NST06 の発掘調査

マスタバ墓 NST06 は第8次調査において発見された墓であり、下部構造は崖下の岩盤を掘削して造成されている。第8次調査ではシャフトの封鎖壁上端が露出する深度まで掘削が進められたため、第9次調査ではシャフト底部までの完掘および埋葬室の確認を目標とした。シャフト内からは初期王朝時代から古王国初期に比定される土器片が出土し、ビール壺や大型貯蔵



図5 西側構造物大型矩形ピット(R-74)



図6 イヌの骨が大量に検出されたシャフト NST07

壺が含まれていた。シャフトの底部まで土砂を除去したところ、東側に階段、西側に墓の入口が確認された。封鎖壁直上の黄色細砂層からは、第2王朝から第3王朝に年代づけられる模造石製容器2点および木製遺物1点が出土した。

NST06の下部構造は、シャフト、入口、前室、埋葬主室、および後室から構成されていた(図7・図8)。前室は南北116cm、東西135cm、高さ180cmであり、主室は南北362cm、東西178cm、後室は南北128cm、東西197cmを測る。床面には天井崩落に伴うタフラ塊および破片が散在していた。主室南東隅か

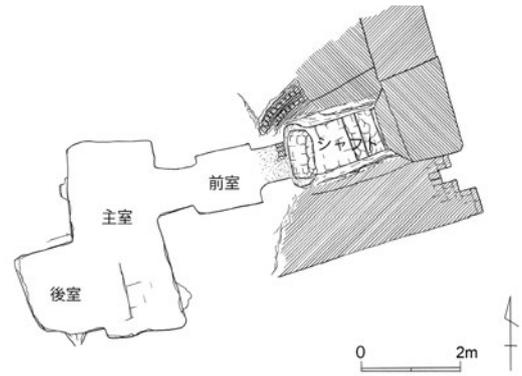


図7 マスタバ墓 NST06 平面図(作図 柏木裕之氏)

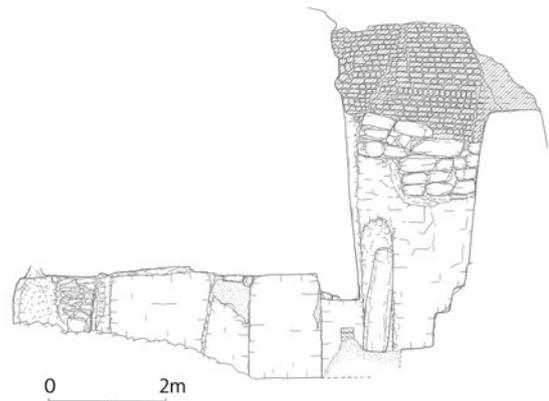


図8 マスタバ墓 NST06 の下部構造北側エレベーション図(作図 柏木裕之氏)

らは人骨1点が検出された。第9次調査では前室のみを発掘対象とし、埋葬室の完掘は次期調査で実施予定である。遺構および出土遺物の特徴から、NST06は初期王朝時代第2王朝から第3王朝にかけての墓と推定される。

4. Operation B の土壙墓の発掘調査

第9次調査ではOperation Bにおいて計11基の土壙墓を発掘した。このうちR-105、R-137、R-139、R-140は新王国時代第18王朝の埋葬と考えられる。ほか7基の年代は現時点では未確定である。ここでは特徴的な遺構を中心に報告する。

R-137(図2)は北北西—南南東軸をもつ土壙墓であり、R-136およびR-123と切り合い関係にあるため正確な規模は不明である。攪乱を受けた木棺が検出され、人骨は散逸していた。東壁付近には埋葬当時の埋土が残存し、ほぼ完形の長頸壺および皿型土器が出土した。さらに木棺下層の黄色細砂層からも完形に近い皿型土器が出土し、これらの土器編年からR-137は

第18王朝前半に比定される。

一方、カタコンベ近傍北部から検出されたR-104(図2)は、南南東—北北西軸をもつ楕円形小規模土壙墓である。検出時には石灰岩片が土壙内に敷設され、蓋石状構造を形成していた。これを除去すると、幼児とみられる人骨がうつ伏せの伸展葬の状態を確認された。頭位は南南東で、両手は体側に置かれていた。人骨には包帯が残存し、ミイラ化の痕跡が認められた。両脇には土器片・石灰岩片・日干レンガ片を再利用した簡易壁体が構築されていた。使用された土器片の型式から、本遺構は新王国時代以降の埋葬と考えられる。

5. 南側斜面の発掘

Operation B 周辺では、初期王朝時代から古王国時代の墓および新王国時代を中心とする土壙墓が多数検出されており、その分布範囲を把握するため、第9次調査では南側斜面の土砂除去を集中的に実施した。堆積層は上位より、現代攪乱層、タフラA層(タフラ層と灰色砂層の互層)、タフラB層(タフラ塊と日干レンガ片主体)、黄色細砂層(タフラ小片を包含)に区分される。タフラA層からは人骨3体(うち1体にローマン・ランプが伴出)、タフラB層から人骨1体、黄色細砂層から人骨4体が検出された。黄色細砂層の4体のうち2体は葦簀巻き埋葬、1体は未攪乱の木棺埋葬(R-138)(図9)であった。R-138では、木棺内の人骨は南東を頭位とする仰臥伸展葬で、両手を骨盤上に置いていた。左手付近から小型コウロイドが出土し、木棺外側頭部付近からは第18王朝前半に特徴的な長頸壺2点が伴出した。これらの所見から、本埋葬は新王国時代第18王朝に比定される。

6. カタコンベ内部のクリーニングと入口前の発掘

(1) カタコンベ内部のクリーニング

第9次調査では、R1~3区画およびL1~3区画において約40~50cmの深さまでクリーニングを行った。ただし、L1~2区画南壁沿いは崩落の危険性があったため発掘を中止し、構造安定のため堆積砂を残置した。R4およびL4区画では掘削深度を10~20cmにとどめた。その結果、R1~3全域およびL1~3の一部で床面が確認された(図10)。床面から天井までの高さは、入口付近のR1およびL1で1.97m、R2~3およびL2~3で2.07mであった。床面直上の遺物は極めて少なく、大半は黄色細砂層から出土した。主



図9 未盗掘の表層埋葬あるいは土壙墓(R-138)

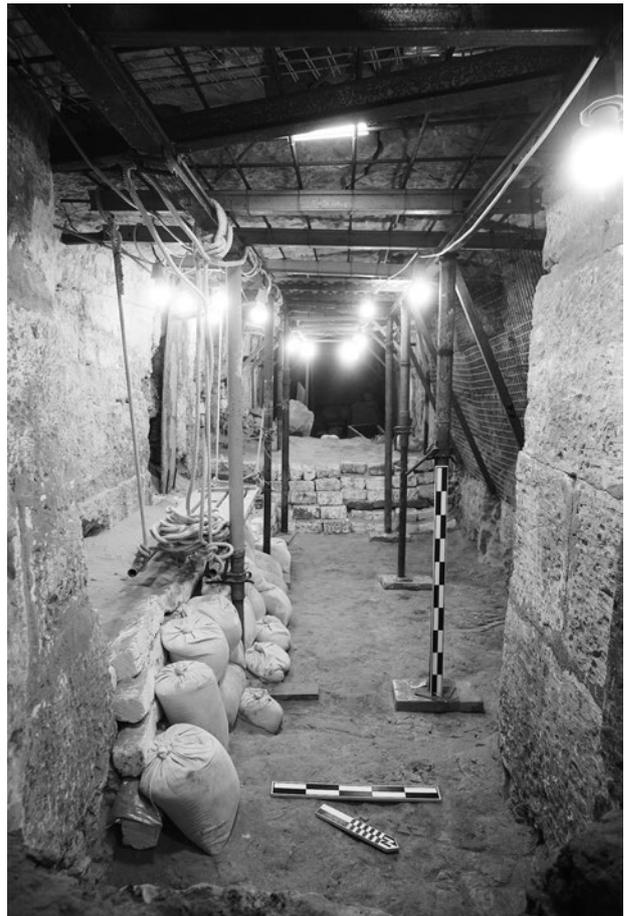


図10 カタコンベ内部床面検出状況

な遺物はローマン・ランプ、土器、木製遺物、貝殻、テラコッタ製小像片、ウラエウス文様装飾木製遺物などである。

(2) カタコンベ入口前の発掘

カタコンベ入口両脇には石灰岩および日干レンガ片からなる壁体を確認されており、カタコンベ長軸と平行に構築されていることから、土留め機能を有していた可能性が高いと考えられている。これらは第5次調査で既に検出されていたが、高さや構築面の状況、入口前レンガ構造との関係は不明であった。

第9次調査では入口前を部分的に掘削し、併せて南側壁体周辺を東西グリッドに沿って深掘りした。その結果、南側壁体の伸びは、ヴォールト天井を有する下降通路前のレンガ構造東端と一致することが判明した。今後の精査を要するものの、現段階で到達した掘削面が構築面であるとするれば、壁体は少なくとも50cm以上の高さを有していたと推定される。

7. まとめ

第9次北サッカラ遺跡調査では、第7次調査、第8次調査と同様に初期王朝時代からグレコ・ローマン時代に至る多時期の埋葬遺構が確認され、本発掘調査地区が長期にわたり利用された墓地空間であったことが明らかとなった。

Operation Aでは、マスタバ墓NST03の埋葬室を完掘し、大量のビール壺とダミー供献に象徴される供物儀礼の実態が把握された。また、同墓が先行する初期王朝時代第1王朝頃のマスタバ墓を再利用して築造された可能性が示され、墓地空間の再編過程を検討する重要な資料が得られた。併せて検出された大量のイヌの埋葬痕跡は、周辺の関連遺構と相まって後世における宗教活動に関連する再利用を示唆する。

Operation Bでは、マスタバ墓NST06のシャフト完掘により下部構造の構成が明確となり、本墓が第2王朝から第3王朝にかけて造営された可能性が高いことが確認された。また、新王国時代第18王朝を中心とする土壙墓群や未攪乱木棺埋葬の発見により、当該時期の葬送実践の多様性が具体的に示された。

さらに、カタコンベ内部のクリーニングおよび入口前の発掘によって構造の一端が明らかとなり、グレコ・ローマン時代の集団埋葬活動の実態解明に向けた基礎資料が蓄積された。

以上の成果は、北サッカラ台地東側斜面が初期王朝期墓域を基盤としつつ、時代ごとに機能を変化させな

がら重層的に利用された動態的墓地であったことを示している。今後は各時期の埋葬の編年的整理を進めることで、サッカラ墓地の形成史と埋葬文化の変容をより包括的に解明する必要がある。

本調査研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)「エジプト、サッカラ遺跡の調査による古代エジプトの埋葬文化の変容に関する総合的研究」(研究代表者：河合望(筑波大学)、課題番号：23H00014)の助成を受けて実施された。発掘調査に参加した主要メンバーである、高宮いづみ氏、荻谷浩子氏、高橋亮介氏、阿部善也氏、村串まどか氏、覚張隆史氏、山田綾乃氏、鈴木萌花氏、Professor Salima Ikram、Dr. José Alba Gomez、José Ignatio Forcadell、Nadezhda Reshetnikova氏に記して感謝申し上げます。また調査を許可をしてくださったエジプト考古最高評議会の関係者の皆様には心から御礼申し上げます。

■参考文献

- ・Kawai, N. 2024 Excavating the Eastern Escarpment at North Saqqara. *Egyptian Archaeology* 65, 21-25.
- ・Kawai, N. 2021a Exploring the New Kingdom Tombs at North Saqqara: Preliminary results of the Archaeological Survey from 2016 to 2017, In M. Bárta, F. Coppens, J. Krejčí (eds.) *Abusir and Saqqara in the year 2020*, 245-262, Prague, Faculty of Arts, Charles University.
- ・Kawai, N. 2021b A Newly discovered Roman catacomb at North Saqqara: Recent results and future prospects, In M. Bárta, F. Coppens, J. Krejčí (eds.) *Abusir and Saqqara in the year 2020*, 331-346, Prague, Faculty of Arts, Charles University.
- ・河合望 2024 「エジプト、サッカラ・ネクロポリスの展開を探る—エジプト、第6次・第7次北サッカラ遺跡調査(2023)—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』91-95頁 日本西アジア考古学会。
- ・河合望 2025 「エジプト、サッカラ・ネクロポリスの展開を探る—エジプト、第8次北サッカラ遺跡調査(2024)—」『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』85-89頁 日本西アジア考古学会。